

短 報

愛媛県今治市宮窪町九十九島におけるウチヤマセンニューウ *Locustella pleskei* の観察記録

西尾 喜量 *

Observed of the Styan's Grasshopper Warbler *Locustella pleskei* on Tsukumo Island, Imabari City, Ehime Prefecture

NISHIO Yoshitomo

Abstract : In 2022, we carried out a habitat survey of the Styan's Grasshopper Warbler on nine islands around Oshima, Imabari City. Among them, the Styan's Grasshopper Warbler was discovered on Tsukumo Island in Imabari City. Styan's Grasshopper Warbler inhabits the north and west sides of the island. Investigation confirmed the presence of adults. In addition, confirmed the call of a juvenile. But the nest were not found.

キーワード : ウチヤマセンニューウ, 今治市, 九十九島

Key words : *Locustella pleskei*, Imabari City, Tsukumo-Island

はじめに

ウチヤマセンニューウ *Locustella pleskei* はスズメ目センニューウ科に属する鳥類で、日本や朝鮮半島、ロシア沿海地方の島嶼部で繁殖し、中国南部やインドシナ半島北部にかけての地域で越冬する（永田, 2008; 日本鳥学会, 2012; 愛媛県レッドデータブック改訂委員会, 2014）。国内では九州および瀬戸内海沿岸の一部の島、紀伊半島の沿岸や一部の島嶼部、伊豆諸島などの限られた島嶼部でしか繁殖しておらず（永田, 2008; 小川ほか, 2016; 水谷・叶内, 2020）、環境省レッドリストで絶滅危惧 IB 類、愛媛県レッドリストでは絶滅危惧 2 類に指定されている（愛媛県レッドデータブック改訂委員会, 2014）。

愛媛県内では忽那諸島の小安居島で繁殖が確認されており（小川ほか, 2016）、その周辺の島嶼部でも繁殖期に本種とみられる観察記録がある（小川ほか, 2016）。本種は島嶼部でしか繁殖しておらず、また無人島での記録が多い。2012 年から 2014 年には、松山市沖の忽那諸島から今治市沖の斎灘にかけての海域で、本種の生息調査が行われたが、瀬戸内海沿岸には他にも数多くの島があり、まだ生息が確認されていない未知の繁殖地が存在すると思われる。

筆者は 2022 年に、今治市大島周辺の海域に点在する九十九島、カマギ島、比岐島、小比岐島、鼠島、美濃島および家ノ島、明神島、梶島、横島の 9 箇所の島嶼で本種の生息調査を行った（図 1）。そのうち、今治市大島

の沖合 400m にある九十九島で本種とみられる個体を確認した。なお本記録の概要は、日本野鳥の会愛媛会報（日本野鳥の会愛媛, 2022）で既に報告したが、本報告では観察状況の記述と詳細な考察を行った。

調査方法

本調査は、2022 年 5 月 31 日、6 月 12 日、7 月 17 日、7 月 26 日の計 4 回行った。うち 5 月 31 日の調査は島の沖合から船で島に接近してエンジンを停止し、本種の生息を確認する方法で行った。後の 3 回の調査は島に上陸し生息調査を行った。調査には 8 倍の双眼鏡、焦点距離 500 mm の望遠レンズ、IC レコーダー、集音マイクを用いた。時間帯は雄の囀りが盛んな日の出時刻から午前 10 時頃まで行った。上陸調査の際は、生息数を把握するため、島の周囲を歩き囀っている個体を観察するラインセンサス法と、盛んに鳴き声が聴かれた場所では 1 ~ 2 時間程度、スポットセンサス法を用いて生息状況を観察した。複数個体が同時に囀っている時は、集音マイクを用いて、鳴き声が重なっていないことを確認しながらカウントした。ソングポストやテリトリーの境界部分での争いも詳細に記録した。7 月中旬以降の調査では、繁殖が行われていること推定し、幼鳥の生息調査も行った。営巣場所の特定は、安全管理上、生息環境への影響等を考慮し行わなかった。

* 〒 794-2110 愛媛県今治市吉海町八幡 10-1

10-1 Yawata, Yoshiumi, Imabari, Ehime. 794-2110, Japan.

九十九島の概要

九十九島 (34° 8′ 49.6″ N, 133° 5′ 7″ E) は、今治市大島の南東沖にある、面積 17,500m²、最高標高 42 m の島である (大高, 1991; 国土地理院, 2022)。室町時代には能島城の支城があったが現在は無人島である (今治郷土史編さん委員会, 1987)。島の植生は環境省植生図によると島全体がクロマツ群落とある (環境省自然環境局より) が、著者が上陸した 2022 年時点では、ウバメガシ *Quercus phillyraeoides* やクスノキ科の木を中心とした常緑広葉樹にハゼノキ *Toxicodendron succedaneum* やアカメガシワ *Mallotus japonicus* などの落葉広葉樹、メダケ *Pleioblastus simonii* などの小高木が混じる、いわゆる雑木林であった (図 2)。

九十九島以外の島嶼の概要

生息が確認された九十九島以外の、カマギ島、比岐島、小比岐島、鼠島、美濃島および家ノ島、明神島、梶島、横島の 8 箇所の島嶼のうち、有人島は比岐島と美濃島および家ノ島のみである。カマギ島はマツ類が疎らに生える程度で植生に乏しく花崗岩質の斜面が所々むき出しになっていた。比岐島、小比岐島、鼠島、梶島においては植生図によるとクロマツ群落や裸地雑草群落 (環境省自然環境局より) とあるが、実際はウバメガシを中心とした常緑広葉樹林に落葉広葉樹の混じる雑木林になっていた。美濃島も常緑広葉樹林に落葉広葉樹の混じる雑木林だったが、島の中心部分まで住宅跡があり、家ノ島に当たる部分は工場地帯もしくは裸地で植生はほとんどなかった。横島は裸地部分こそ少ないものの、植生のほとんどがマツ類であった。

調査結果

九十九島以外の島嶼の生息状況

5 月 31 日の調査は島の沖合から船で島に接近してエンジンを停止し、本種の生息を確認する方法で行った。調査時間は午前 6 時～9 時 30 分頃まで行った。九十九島以外の、カマギ島、比岐島、小比岐島、鼠島、美濃島および家ノ島、明神島、梶島、横島でも船上からの調査を行ったが本種は確認されなかった (表 1)。

九十九島における本種の生息状況

5 月 31 日、午前 8 時 15 分頃、島の北側斜面で雄 1 個体の囀りが聴かれた (図 3, × 部分)。最初「チリリリリ」と警戒声のような声が聴こえ、その後囀りが 2 声程聴こえた。その際、本種の姿は確認できなかった。船で岸に近づいた際にはエンジンをかけていたが、接近したことによる逃避かどうかは分からなかった。

6 月 12 日は本島の上陸調査を行った。前回調査で囀

りが聴こえた北側斜面は、岩礁が急傾斜のスロープ状になっており足場が悪く直下に上陸できないため、北西部の砂浜から集音マイクを用いてスポットセンサスを行った。囀りは上陸した午前 6 時頃から 20～30 分おきに 4～5 回程度繰り返し聴こえ、9 時を過ぎる頃にはほとんど鳴かなくなった。鳴いている際も木の枝や目立つような場所には現れず、姿を確認することはできなかった。囀りが聴こえた場所は島の西側斜面の沢のようになっている場所で、ハゼノキやメダケなどの小高木が繁茂していた。調査では雄 1 個体の生息が確認された (図 3, ○ 部分)。

7 月 17 日の上陸調査では調査員 2 名で島の周囲を回るラインセンサス法と、前回囀りが聴かれた西側斜面下でスポットセンサス法を行う者に分かれて調査を行った。ラインセンサスでは島の南岸から北岸までを反時計回りに歩いたが、囀っている個体は観察されなかった。スポットセンサス法では、囀っている雄個体 2 羽が観察され、囀りは 2 時間程度、断続的に聴こえた (図 3, ▲ 部分)。1 個体のテリトリーは半径約 10～15m 程度で、1 個体が囀るタイミングでもう 1 個体が声を重ねるように囀り、2 羽の距離が接近した際には排斥行動も見られた (図 3, ▲ 部分)。また雄個体が囀っている木の直下で断続的に幼鳥とみられる鳴き声も聴こえたが、幼鳥の姿は観察できなかった。

7 月 26 日の上陸調査では日の出前の午前 4 時 30 分頃から上陸し、前回成鳥雄と幼鳥の鳴き声が聴こえた西側斜面下の砂浜でスポットセンサス法を用いて調査を行った。囀りは日の出時刻の 5 時 15 分頃から聴かれ始めた。前回調査よりも囀る間隔が長くなり、回数も調査終了の午前 8 時まで 4～5 回程度であったが、島の西側斜面で 2 個体の囀りを確認した (図 3, ● 部分)。本調査ではアカメガシワの頂部で囀っている雄 1 個体を観察した (図 4-A)。囀っている最中、ウグイス *Cettia diphone* と縄張り争いをする行動も観察した。その際、姿勢を低くし、尾羽立てて威嚇するような行動も見られた (図 4-B)。その後も茂みの中を移動する姿を確認した (図 4-C, D)。本調査でも断続的に幼鳥とみられる鳴き声が聴こえたが、姿を確認することはできなかった。

考 察

5 月から 7 月までの計 4 回の調査で最大数、成鳥雄 2 羽、幼鳥 1 羽を確認した。確認した場所は島の北西に集中しており、鳴き声もそれ以外の場所では確認されなかった。幼鳥の鳴き声については、バードリサーチの鳴き声図鑑 (バードリサーチ, 2022) を参考にした。

本島は中心に向かって標高が高くなる U 型の地形になっているが、北西斜面には一部に小さな沢のような窪

んだ地形があった。他の島嶼でも本種は谷状の地形に生息していることが多いことから（小川ほか，2016），今回もそのような傾向がみられたものと考えられる。成鳥雌が確認されなかったのは，雄と違い囀らないことや本種が藪の中を潜行する習性のためであると考えられる。育雛期であれば頻りに餌運びを行うため観察が容易と考えられるが，本種は雌雄同色のため，姿のみで識別するのは困難であると考えられる。

営巣については今回の調査では確認できなかったが，7月以降の調査で幼鳥とみられる鳴き声を観察したこと，巣材によく利用されるクスノキ科の高木，メダケなどの植物が（中村ほか，1999；小川ほか，2016）がテリトリー内に生えていたことなどから，本島で繁殖している可能性は非常に高いと推測した。また本種は8月上旬頃まで育雛を行うことが確認されているため（中村ほか，1999），巣外育雛期に調査を行えば幼鳥を観察しやすいと考えられる。

囀りが聴かれた間隔は20～30分に1回程度で，1羽が鳴き始めると，それにつられるように，もう1羽も鳴き始めるといったパターンが多かった。考えられる要因として，本島における生息密度が低く，ライバルとなる他のオスとの競争が少ないことなどが考えられる。

直近にある本種の主要な繁殖地は，松山市沖の小安居島であり，2013年時点で，雄の個体数が約20～30個体とされる（小川ほか，2016）。他にも愛媛県内の7箇所の島嶼で生息が確認されているが，いずれの生息地も生息数は非常に少ない。これは本種が繁殖地への執着が強いことや（NAGATA, 1993），同種誘因性がある（WARD and SCHLOSSBERG, 2004）ことが考えられている（小川ほか，2016）。このことから今後，九十九島での生息数が極端に増加することは考えにくい，主要な繁殖地で大きな環境変化があった場合に，その周辺の島嶼に繁殖地が移る可能性が考えられる。本島も大雨や地震などの自然災害に起因する土砂崩れで，環境が改変されることが考えられる。また福岡県の生息地ではドブネズミ *Rattus norvegicus* による本種の捕食が確認されており，個体数が減少している（永田，2008）。他にもイノシシ *Sus scrofa leucomystax* やシカ *Cervus nippon nippon* が上陸することにより島の下層植生が変化する危険性も考えられる。本島は直近の大島から400m程度しか離れておらず，これらの動物は泳いで渡ることも十分考えられる。こういった自然災害やその他の動物による，環境改変のリスクが少なからずあるため，今後も継続した生息数および繁殖状況の把握は必要であると考えられる。

今回の調査で生息を確認した九十九島は，瀬戸内海の中央部に位置し，本種の愛媛県内における生息地の中では最も東限となった。本島は以前より生息が確認されていた怪島とは，芸予諸島を挟んで東側の燧灘になるため，

これより東の海域の島嶼でも生息が確認される可能性が高い。今後も継続した生息地の把握が必要であると考えられる。

謝 辞

本研究において調査に関するご助言，現地調査にもご協力いただいた日本野鳥の会愛媛副代表の小川次郎氏，本島への船を出してくださった今治市宮窪町の藤本氏，渡辺氏には心よりお礼申し上げる。また本調査は日本野鳥の会愛媛の島嶼部調査費の助成を受けて行った。会員の皆様にはこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

引用文献

- バードリサーチ，2022：バードリサーチ鳴き声図鑑，ウチヤマセンニューウ。 <https://www.bird-research.jp/1-shiryo/search.cgi?data00=%E3%82%A6%E3%83%81%E3%83%A4%E3%83%9E%E3%82%BB%E3%83%B3%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%82%A6>（2022.9.2参照）。
- 愛媛県レッドデータブック改訂委員会，2014：愛媛県レッドデータブック2014， https://www.pref.ehime.jp/reddatabook2014/detail/02_06_013490_0.html（2022.8.23参照）。
- 今治郷土史編さん委員会，1987：伊豫史料叢所（伊豫の古城跡）。今治地誌集。今治市。p.867。
- 環境省自然環境局：自然環境調査Web-GIS。1/5万植生図。 <http://gis.biodic.go.jp/webgis/index.html>（2022.8.23参照）。
- 国土地理院，2023：地理院地図。 <https://maps.gsi.go.jp/#13/34.131060/133.044434/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c0glj0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0&d=m>（2023.6.8参照）。
- 水谷高英・叶内拓哉，2020：フィールド図鑑日本の野鳥第2版。文一総合出版，p.320。
- NAGATA, H, 1993: The structure of a local population and dispersal pattern in the Styan's grasshop. warbler, *Locustella pleskei*, *Ecol.Res.*8, p.1-9.
- 永田尚志，2008：ウチヤマセンニューウ。 *Bird Research News*, 5, p.2-3.
- 中村豊・児玉純一・井上伸之・岩切久，1999：宮崎県におけるウチヤマセンニューウ *Locustella pleskei* の繁殖初確認。 *日本鳥学会誌*, 47, 2, p.61-63.
- 日本鳥学会，2012：ウチヤマセンニューウ。 *日本鳥類目録改訂7版*, p.295.
- 日本野鳥の会愛媛，2022：日本野鳥の会愛媛会報コマドリ。270, p.19.
- 小川次郎・渡辺奈央・松井宏光・大森浩二，2016：瀬戸

内海忽那諸島およびその周辺島嶼部における絶滅危惧種ウチヤマセンニュウ *Locustella pleskei* の生息状況. Strix, 32, p.125-133.

大高利夫, 1991: 島嶼大事典. 日外アソシエーツ株式会社, p.328.

TECHNOMATE., 2012: 愛媛県の白地図.

https://technocco.jp/n_map/0380ehime.html (2023.6.8 参照).

WARD, M.P. and SCHLOSSBERG, S., 2004: Conspecific Attraction and the Conservation of Territorial Songbirds. Conservation. Biology., 18, 2, p.519-525.



図1. 調査地 (5/31 の船上調査での調査地)

1. 九十九島, 2. カマギ島, 3. 比岐島, 4. 小比岐島, 5. 鼠島, 6. 美濃島および家ノ島, 7. 明神島, 8. 梶島, 9. 横島 (愛媛県の白地図より地図を編集)



図2. 生息が確認された九十九島の北西斜面(2022年6月12日、撮影：西尾喜量)

表1. 調査日時と調査結果. * 島の植生は環境省植生図（環境省自然環境局より）を参照.

調査日 (Study date)	島嶼名 (Name of Island)	調査時間 (Study time)	調査方法 (Survey method)	最大確認羽数 (The maximum number)	島の植生* (Plant community)
5月31日	九十九島	8:15～8:45	船上調査	1	クロマツ群落
5月31日	カマギ島	6:10～6:20	船上調査	0	データなし
5月31日	比岐島	6:35～6:50	船上調査	0	クロマツ群落, 常緑果樹園, ウバメガシ群落
5月31日	小比岐島	6:55～7:10	船上調査	0	クロマツ群落
5月31日	鼠島	7:15～7:25	船上調査	0	クロマツ群落
5月31日	美濃島(家ノ島)	7:30～7:40	船上調査	0	クロマツ群落, 市街地, 工場地帯
5月31日	明神島	7:40～7:50	船上調査	0	クロマツ群落, 裸地雑草群落
5月31日	梶島	7:55～8:05	船上調査	0	クロマツ群落, 裸地雑草群落
5月31日	横島	8:50～9:10	船上調査	0	クロマツ群落
6月12日	九十九島	6:00～10:00	スポットセンサス	1	クロマツ群落
7月17日	九十九島	9:15～11:00	ルートセンサス, スポットセンサス	3	クロマツ群落
7月26日	九十九島	4:30～8:00	スポットセンサス	3	クロマツ群落

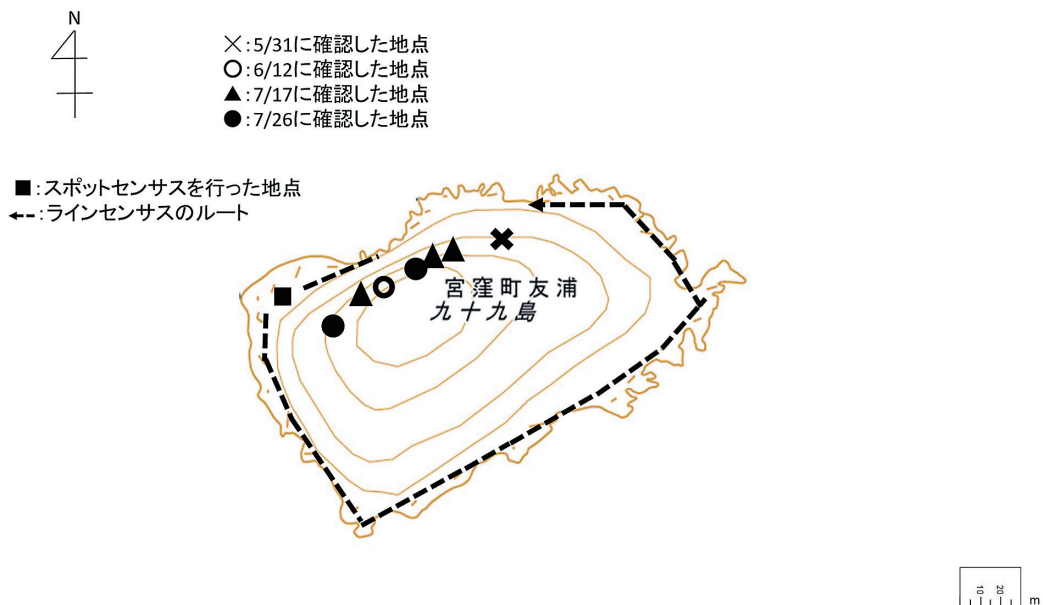


図3. 九十九島のウチヤマセンニューウの分布図（国土地理院地理院地図より地図を編集）



図4. 愛媛県今治市宮窪町九十九島で観察されたウチヤマセンニュウ. (A) 右側面と右下腹部, (B) ウグイス (左) に対して威嚇姿勢をとるウチヤマセンニュウ (右), (C) 左側面と脚, (D) 左側頭部, 胸部と腹部, 下尾筒と下尾羽 (2022年7月26日. 撮影: 西尾喜量)